



渋沢栄一秘書 白石喜太郎の驚き

宮本孝一 老年学情報センター

櫻園通信 67 令和3年1月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

渋沢栄一の秘書が、亡くなる三年前、八十八歳の渋沢の様子を書き残しています。

ラジオ放送で渋沢が講演をした日の朝と、放送の様子です。

講演は「御大礼に際して迎ふる休戦記念日に就て」というもので、第一次世界大戦休戦の記念日に毎年、社団法人国際連盟協会会長としてラジオ講和を行っていました。東京の愛宕山に日本放送協会の放送局ができて日本にラジオ放送が始まったばかりの時代です。

この日は、第十一回休戦記念日の放送。一国の利益のみを求め他国を顧みないのは正しい道徳ではない。共存共栄・経済協調によつてはじめて国民は安心して生活ができる。政治経済と道徳の一致が必と説いています。

まずはその日の朝の様子から。読みやすいよう、漢字をかなに変えたところや改行したところがあります。

午前九時飛鳥山邸へ行く。

このころ朝の遅い子爵がもうすっかり用意を整へて、今日の講演の原稿に手を

入れておられる。

西洋館の居間の北側の窓に面し、青羅紗を張つた低い円卓を前にしておられる。

正面からは弱い光が差し、やや後の東側の大きな窓から美しい朝日が勢よく飛込んでいます。

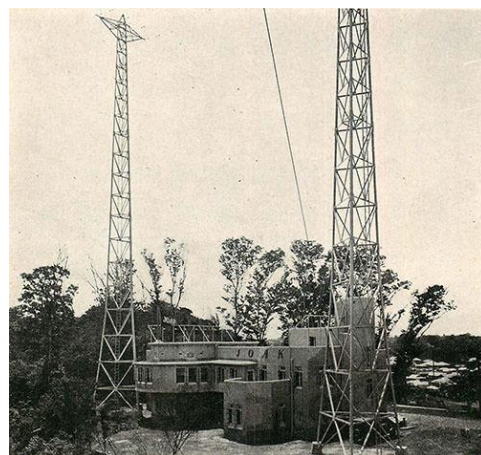
強弱二様の光の相交錯する辺りに、九十に近い子爵が眼鏡も掛けずに筆を運ぶ様はどうしても画である。

明窓浄几と題すべき形である。(略)

国際知識 第二二巻第二号・第五五―五八頁昭和七年二月 休戦記念日の想ひ出 故渋沢子爵秘書役白石喜太郎 (PK370052k-0005) 第37巻 p.223-224



九時半ごろ渋沢は書き終わった原稿を秘書に読ませて意見を聞きます。秘書は二、三気になった所を指摘。そこでまた渋沢は原稿を修正。十時前に邸宅を出て愛宕山の放送局へ。



小さな放送室に入ると、アナウンサーとしばし会話。「一体話し方はどういのがよいのですか。人によつては誠に聞き苦しいことがありますか……」「調子の早い方は具合が悪うございます。ゆっくりの方がよく入るようでございます。かん高い方でも早くなければ、そんなに聞き苦しくはありません」

そして、いよいよ放送スタート。

「J O A Kこちらは東京中央放送局であります。これから御大礼記念国際講演に移ります。有線中継でありますから準備の都合で、しばらくそのままお待ち願ひます」

またしても異常の沈黙が広がる。事実一分経たぬかも知れないが、非常に長いような気がする。やがて沈黙は破れた。

「お待ちせいたしました。それではこれから御大礼に際して迎ふる休戦記念日に就て、と題する子爵渋沢栄一氏の講演がでございます」

子爵はおもむろに原稿を拵げ、眼鏡なしで始められる。

「私がただいま紹介された渋沢栄一であります。」

反響のない室のせいかやや低く聞えるが、語調と云ひ、語勢と云ひ、極めてよい。とても朗読とは思へぬ話し振である。

ときどき原稿をはなれて註釈を加へられまた原稿に戻るのが、極めて自然で、原稿を知らぬ人には恐らく分るまいと思はれるほどである。

咳を一度されたきりで、水一つ飲まれず、元気に続けられる。

「これで私のお話を終ります」

と結ばれてもなお話したそうに見えた。

アナウンサーの結辞をまつて静かに室を出る。吉例によつて記念撮影である。

(略)

国際知識 第二二巻第二号・第五五―五八頁昭和七年二月 休戦記念日の想ひ出 故渋沢子爵秘書役白石喜太郎 (DK370052K-0005) 第37巻 p.225-226



この渋沢栄一の秘書白石喜太郎の回想ですが、渋沢の特徴に繰り返し触れています。白石にはこれが渋沢について特に強調したかったところなのでしょう。

「九十に近い子爵が眼鏡も掛けずに筆を運ぶ様」「おもむろに原稿を拵げ、眼鏡なしで始められる」

人間は四十歳ごろから眼球のレンズ(水晶体)が固くなり、近いものにピントが合わなくなります。老眼です。

また高齢になると白内障や緑内障などの目の病気が起こりやすくなります。

しかし渋沢栄一は八十八歳で眼鏡無しで原稿を読み書きしていたのです。



この日のラジオ放送は録音され、国際連盟協会によりレコードが作られました。

また、現在もこのラジオ放送の音声を聞くことができます。渋沢史料館発行のCD「肉声で聞く渋沢栄一の思想と行動」に収録され、史料館オンラインショップで販売されています。